

## 実証的、科学的精神を学ぶ

狭間 久

新聞社に入って郷土史をかじり始めた最初は、昭和三十八年に「大分の古戦場」を、宮瀬香多士文化部長と、共同執筆してからである。郷土史家の立川輝信、田北学、北村清士氏らにご教示を受けた。

四十年に「郷土史のナゾ」を連載した時、大友能直の出自のことで、渡辺先生に取材したのが、お目にかかった最初だったと思う。

翌四十一年、渡辺先生は大分合同新聞文化賞を受賞され、その記事を書くため、津久見のご自宅を訪れた。いま古いスクラップを見ると、先生はこの時五十四歳。二十九年に大分県地方史研究会を創立、その委員長として『大分県地方史』を四十号発刊していた。

私は当時二十八歳。新聞記者六年の若造だったので、業績紹介をきちんと書いてくれるのか、先生は多分に心配だったのでろう。「戦前の狭い意味の郷土史」研究に、実証性と科学性を吹き込み、日本史の中の「地方史」として新しい郷土史研究の基礎を築いた」ことを書いてほしいと、何度も念を押された。

ちよつと神経質だなと感じたが、半面、それはそのまま、先生の合理的、実証的な研究態度に通じるのだなあ、と変に感心して、印象に残っている。

その後、四十六年から「豊後大友物語」を新聞に連載したが、連載中、先生にお会いすると「なかなか健筆だな」とお褒めの言葉をいただいた。先生の大野荘史料や大友氏の嫡子単独相統制などは大変参考になったが、先生のいう実証的、科学的研究を身をもって感じ取れた。そういう研究態度が私のその後の歴史物取材の基本になったように思う。

新聞社が出した『大分の歴史』（全十巻）の時、先生は輸血が原因の肝炎にかかり、「中世」を加勢してほしいといわれ、光栄に感じた。先生に私淑した一人として、先生の実証的、科学的精神を受け継いで行きたい。

（大分合同新聞特信局理事・論説委員）